

山田寺出土の硯

はじめに 奈良県桜井市に所在する特別史跡、山田寺跡の発掘調査は当研究所が1976年以来、11次にわたりおこなってきた(図27)。中樞伽藍と周辺施設の位置や規模・構造、変遷を明らかにしたのに加え、倒壊の状態をそのままとどめた東面回廊の発見など大きな成果をあげている。それらの報告は『概報』のかたちで順次をおこない、2002年には本報告を刊行している¹⁾。さてこの度、山田寺の出土遺物が重要文化財に指定される見込みとなり、それに向けたデータ整理等が現在おこなわれている。そのうち、未報告となっていた硯をここで紹介する。

出土した硯 圈足円面硯・蹄脚円面硯・長方形硯など7点の陶硯と、1点の転用硯がある(図28)。

1は4次調査、LJ16区SD531西肩の瓦敷から出土した圈足円面硯で、脚部を欠く。外提径は復原8.4cmで、その約1/7が残存する。焼成時に硯面を上にした正置焼成で、硯面と外側面の全面に自然釉が厚くかかる。自然釉は淡黄色とオリーブ黄色がモザイク状に混ざる色調。陸部は磨られてはいるが、自然釉による凹凸が残る程度である。2は8次調査時、宝蔵SB660の北のLR20区黒灰色粘質土層から出土した圈足円面硯で、脚部を欠く。外提径は復原10.8cmで、その約1/8が残存する。脚部には12単位に復原できる方形の透孔をもち、透孔を入れる際に使用した刀子とみられる工具跡が、脚部外面に残る。外提部が作る面と陸部は平行ではなく、歪みを生じている。また陸部はよく磨られているものの、多少凹凸があり、やや雑な作りの印象をうける。色調は灰色で、胎土には黒色粒が多く含まれ発泡する。正置焼成で、海部と外側面に灰が被る。3は3次調査時に採取された圈足円面硯で、外提部上端と脚部を欠く。外側面の最大径は復原21.2cmで、その約1/10が残存する。硯部外側面には突帯が2条めぐる。陸部ではロクロナデが確認できる。色調は暗灰黄色で胎土は緻密。焼成時に天地が逆になる倒置焼成で、硯面の裏と、突帯の下面にのみオリーブ色の自然釉がかかる。硯面本体に外提部を貼り付けているようである。4は蹄脚円面硯の輪台。4次調査、LK14区の暗灰色砂土層から出土した。輪台の外径は復元36.2cmと大きい。残存はその約1/10である。上面に三角形の脚の

剥離面が3ヵ所残り、脚は28単位に復原できる。圈台の外側面は円周方向の、底面は不定方向のナデ調整である。内側面は、まず円周方向のケズリないしナデ調整をおこなう。次に脚を貼り付けた後、内側面を円周方向に削り、粘土のはみ出しを取る。色調は暗青灰色で胎土は緻密、焼成も良好である。上面には灰白色の灰が被る。脚を別作りする蹄脚円面硯Aであり、7世紀末から8世紀初頭のものであろう。5は4次調査、LL14区暗灰色砂土層から出土したもの。復原径16.0cmの円盤形で、その約1/6が残存する。硯面は中央部が若干窪み、よく磨られている。裏面は、周縁部のみロクロナデである。外側面は、上半がロクロケズリで、下半は器面が荒れる。上記の特徴から、本来は外提部と脚部をもつ円面硯であろうが、円盤形のままでも使用された可能性もある。その場合、外側面下半の荒れは、破面を調整した痕跡かもしれないが、観察からは断定できない。色調は赤味のある灰褐色で、胎土はやや荒い。6は3次調査KN31区の焼土層から出土した長方形硯。縁部はケズリ出しで、縁部上端から海部にかけては鈍角に削られ、最深部には横方向に工具のアタリ痕跡が残る。陸部はほぼ水平な面をなし、よく磨られている。各外面は、ナデ調整の底部を除い

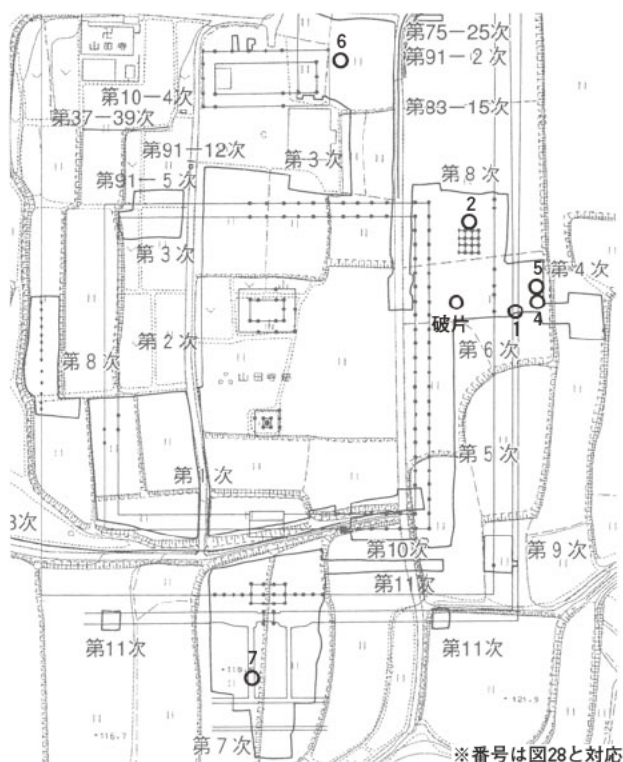


図27 調査区と出土位置

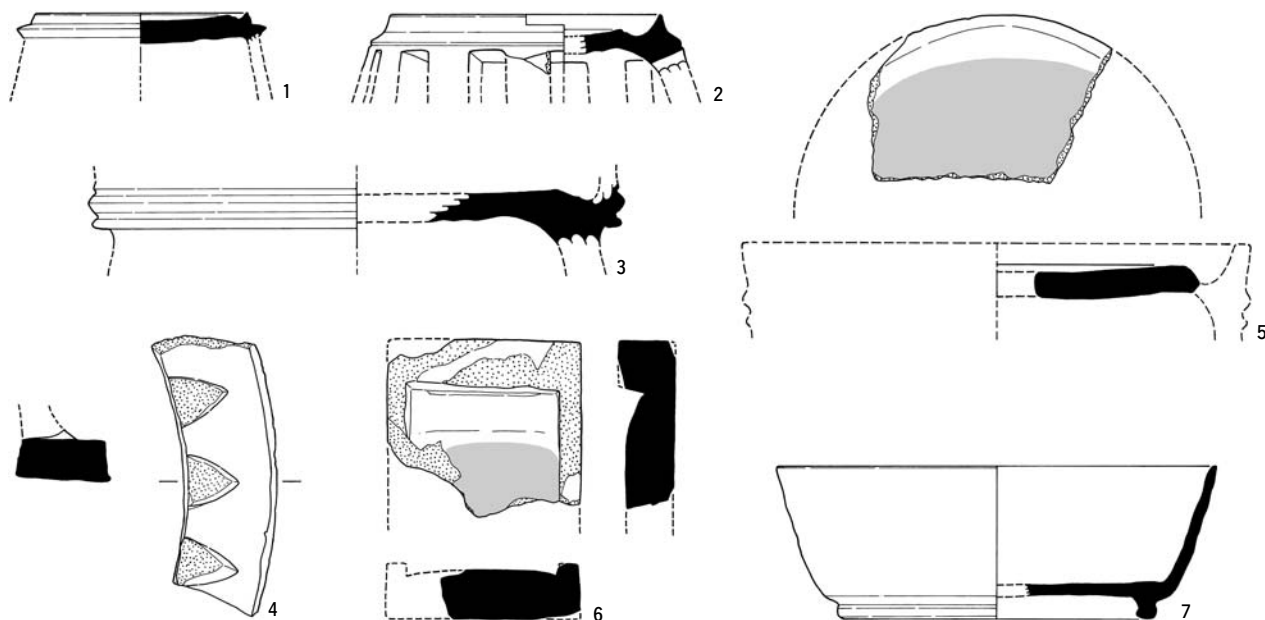


図28 出土した硯 1 : 3

て、ミガキに近いナデ調整で平滑に仕上げている。色調は灰白色。胎土は精良だが白色砂と黒色粒が少量混じる。焼成は堅緻である。形態は石硯の長方形硯のうち、側縁が直立する I Bc の①に類似する²⁾。石硯編年をそのままあてはめるとすれば、15～16世紀頃のものと思われる。7は須恵器の杯Bの底部内面を利用した転用硯。7次調査、NI38区SD612炭化物層からの出土である。SD612は、南門南参道SF610の西側溝にあたる。底部と口縁部の2破片があり、接合はしないが同一個体とみられるため、図上で復原した。底部は全体的に磨られており、底部および破面に朱墨とみられる赤茶色の薄い付着物がある。一方の口縁部片には磨られた形跡はないが、内面に薄く黒い墨が付着する。底部外面はヘラ切りの後、ロクロナデ調整。色調は灰色で、白色砂を多く含む胎土。飛鳥Ⅳに属するとみられる。

これらの他に、8次調査のLR21区黒灰粘質土層から、硯の破片が出土している。約3cm角の硯面の破片で、厚さは約0.9cm。かなり磨られていて非常に平滑な面をもつ。その裏面には自然釉がかかる。

まとめ まず、円面硯が東面大垣の内外で多く出土していることが指摘できる。このうち4の蹄脚硯は、7世紀末から8世紀初頭と考えられ、天武朝の伽藍完成時期にあたる。2と破片が出土した黒灰色粘質土層および、4の出土した暗灰色砂土層は11世紀前半の土器を最新とし

ており、主要伽藍の焼失以前のものである。1も、SD531を切るSD540を覆う層の年代から、少なくとも同様の時期におさまる。出土位置も考慮すると、2と破片は宝蔵SB660との関連が想定できる。また、1・3・4・5は大垣の東方外で検出されていることから「東北院」と関係する可能性がある。寺院での硯の出土は、主要伽藍の外側に際立つと指摘されているが³⁾、今後はより具体的に、どのような性格の施設に伴うのか検討が必要である。例えば、宝蔵SB660は経蔵と考えられているが、『多武峯略記』の記述から他にも経蔵の存在が予想されている。未発掘地区の調査が進めば、遺構と硯の出土がどのような相関をみせるのか、検討する余地がある。転用硯は1点と少ない。飛鳥Ⅳとみられるものだが、朱墨は定型硯ではなく転用硯で使用されている点で興味深い。

最後にこれらの資料のなかで最も新しい6の長方形硯は、中世のものとみられ、出土位置も中世の本堂が想定されている講堂の東である。再建された山田寺に関わるものであろう。

(加藤雅士)

注

- 1) 奈文研2002『山田寺跡発掘調査報告』。
- 2) 水野和雄1985「日本石硯考ー出土品を中心としてー」『考古学雑誌』第70巻第4号。
- 3) 西口壽生2003「畿内における陶硯の出現と普及ー飛鳥藤原地域出土資料を中心としてー」『古代の陶硯をめぐる諸問題ー地方における文書行政をめぐるー』奈文研。